

## 吉良竜夫先生の思い出

元奈良女子大学理学部 菅 沼 孝 之

吉良先生といえば、“暖かさの指数”“寒さの指数”を考案して、森林帯区分をわかりやすく説明され、地域の植物生態学的研究、解説には欠くことのできない指標で、理論的に考案されていて、広く活用された。取りまとめられた全貌は農学関係の刊行物に発表された(吉良, 1951)こともあって、私が手に入れたのは1952年であったが、何人かの同業学者に貸してくれないかと、出版物は当時はもてもてであった。もちろん現在でも役に立つ指標であるが、こう温暖化が続くと森林が追い付けない状態であり、わが国の森林帯を説明するのには便利な指標であり続けているのか、という検証はされていない。

さて『日本の森林帯』の初版が刊行されたのは終戦直後のことで、学制改革によって「新制大学」に移るという年に、私は奈良女子高等師範学校に勤めることになった。略して、奈良女高師には文科、理科、家政科、幼稚園教員養成課程に、寄宿舎まで含めて、さらに高等学校、中学校、小学校の附属学校が加わって、一つのキャンパスにこぢんまりと収まっていた。その後、事務局と附属校と学生寄宿舎はキャンパスの近くに、また市内ではあるが、外に出ていって、終局的には3つの学部と、その上に大学院が増設された。まさにそういう発展途次でも初期の時期であって、女高師生と女子大生が重なることなく淡々と授業が行われていた。

そのような時期に、大学の授業として「植物生

態学」の講義を、大阪市立大学の吉良先生に頼んだよと、上司である小清水卓二教授に聞かされ、私も学生と一緒に講義を聞かせていただくことの許可をもらった。女性に交じって受講するという生まれて初めてのことであったが(小学校6年はもちろん旧制度の中学校、広島高等師範学校の15年間の教室は男性のみであった)、自分の服装は棚に上げて、この時代的女子学生はスカート姿なんていうのには覚えがなくて、戦時中に引き続きというスタイルで、地味な、今でいうジーンズよりももっさりとした服装であった。

さて、吉良先生はというと、紳士という言葉がぴったりはまる背広姿で、その後に吉良先生の鞆を持った小柄の依田恭二さんがついてきた。依田さんは千葉大学出身で、沼田眞先生の研究室で卒業研究を終えて、大阪市大大学院に入学し、吉良研究室に入った方で、たまたまその年に吉良先生が奈良女子大で講義をされるので、聴講することになったのだと聞いた。

依田さんが千葉大学に在籍していたのは、学生運動が華やかな1945年前後で、そのころ沼田先生は、草地、竹林、雑草群落、群落の遷移、さらに東ネパール、タイなどの学術調査にもでかけられていた。沼田先生から後で聞いた話であるが、学生運動の先頭に立っていた依田さんが研究室を訪れて、先生の研究に興味をもち、植物生態学の分野の如何にかかわらず、研究員の一人として野外調査に参加していたと聞いた。

吉良先生が縁故の深い滋賀県（企画部総合開発局）から、1970年に滋賀県の自然保護について調査を依頼されて調査団を組織された。滋賀県は琵琶湖の水質保全を自然保護の中心課題として、優れた自然景観や学術的価値の高い自然を積極的に保護・復活して、生活環境をバランスのとれた健全なものにしようというわけである。

吉良先生からこの調査に加わるよう、私にも声がかかってきた。まだ琵琶湖を一周する道路が無いころのことで、私としては初めて眺める日本一の広さの琵琶湖を巡る滋賀県での調査である。この調査には大阪市大の吉良研究室からは、野外調査に精通しておられた依田さんが加わられてマネージャー役もこなされ、調査が無事終わることができたのは幸いであった。

調査ノートによると1971年は12月21日より24日まで琵琶湖東岸、翌1972年は1月29日から31日、次いで2月13日には尾上港に泊まり、14日は竹生島へ渡り、15日は湖北を調査し、26日27日は湖北から湖西を調査したとある。当時の湖西にはJRの湖西線の高架工事が進んでいた頃で、八所神社にはタブ林があったが、その森をかすめるようにコンクリートづくりの高架工事が伸びている最中であった。調査日程は要領よく組まれており、今考えてもよくもまあと感心するスケジュールで、途中、途切れながらも一周できたが、当時は道路を走る車の数も少なかったことが幸いしたことは確かである。

この調査では、湖西地域にタブ（タブノキ）が生育していることを発見、特に竹生島にタブ林がみられることは、北村二郎先生（編）の滋賀県植物誌（1968）にも書かれていなかったが、林床のササはチマキザサであることは教えられた。また、湖西にタブ林があちこちにあって、湖東には見られないという現象は巨大な水面をもつ琵琶湖に由来するものということと、若狭湾から俗にサバ街

道とよばれている峠を越す街道は、タブが来た道ではなかろうかということを想像した。ただし、このときすでにカワウが竹生島のタブ林に営巣し、糞尿で枯死したタブが望見され、カワウによる樹林被害は今にはじまったことではなかったのである（滋賀県、1972）。

滋賀県の調査に先立って、大台ヶ原山に山岳道路（ドライブウェイ）の建設が進んで山が荒れているということで、日本自然保護協会関西支部で視察が行われたときは、四手井綱英先生、吉良竜夫先生に小清水卓二先生という近畿の大御所のお供をした。山岳道路は国道169号が伯母峯峠を上りきったところから大台ヶ原へ向う山腹を、または脊梁を谷一つ隔てた西側に連なる大峯山脈を眺めながら、1961年を完工目標にして東へ東へと伸ばしていた。建設工事中であるために、道路の周辺のみならず上方も下方も荒れ方はひどいもので、発破によって砕けた石塊が路肩に生育している樹幹に突き刺さりむごい状況を展開していたので、建設道路の周辺の植生、とくに自然林の保護を要望することになった。

その後、1959年には伊勢湾台風の激甚な災害を受けたが、曲がりなりにも開通して、バスが通うようになり、今度は西大台一帯の主要樹木伐採搬出の要望が地権者からでて、自然保護運動は一層盛んになった。その頃、全国自然保護連合が結成され、また関西自然保護機構（KONC）結成の火付け役の片棒をかつぐことになった。全国の自然保護団体を糾合する2年目の会合は奈良市で開催し、席上、吉良先生に講演をお願いし、大成功を収めたのも記憶に残るところである。

吉良先生は学会でも、講義中でも、野外調査中でも、背筋をピンとのばされていたので、久々にお目にかかれた晩年には、背筋が曲がって痛々しかったのが記憶に残るところである。吉良先生はわたしが知る限りではどこでも紳士であったし、

もの静かな口調は独特の風潮を醸しだされていた。その温厚な先生がお亡くなりになったと聞いてびっくりした。最後に吉良先生のお姿を拝したのは、2007年12月22日に大学コンソーシアム京都で、モンゴル調査旅行のお話を聞かせていただいたことで、背中を丸くされ痛々しかったが、お声の調子はお元気な頃と変わらず、また、色んなお話を聞かせていただけるものと期待したものである。お年には不自由はないが、もう少し先生の頭の中に蓄えられた自然の仕組みを、先生のお口からお聞かせいただきたかったと思うこのころであ

る。

先生，どうか安らかに，おやすみください。

#### 参考文献

- 吉良竜夫. 1951. 日本の森林帯 林業解説シリーズ17（再版）. 42pp. （社）日本林業技術協会，東京.
- 滋賀県. 1972. 滋賀県の自然保護に関する調査報告. 66pp.+PL20. 滋賀県，滋賀.

